武蔵野日曜聖書講筵

帰って来なさい
――エレミヤ記第３章――

１９７４年２月24日
小池辰雄

エレミヤ記第３章　我に帰れ　我に帰入せよ　キリストという道に帰道する　ネパールでの伝道報告（省略）

【エレミヤ３】

1 世にいえるあり 人もしその妻をいださんに 去りゆきてほかの人の妻とならば 其夫ふたたび彼に帰るべけんや さすれば其地はおおいに汚れざらんや
汝はおおくの者と姦淫を行えり されど汝われに皈れよと エホバいい給う 2 汝目をあげてもろもろの童山をみよ 姦淫を行わざる所はいずこにあるや 汝は曠野におるアラビヤ人の為すがごとく 路に坐して人をまてり 汝は姦淫と悪をもて此地を汚せり 3 この故に雨はとどめられ 春の雨はふらざりし 然れど汝娼妓の額あれば肯て恥ず 4 汝いまより我を呼びていわざらんや 我父よ汝はわが少時の交友なり 5 窮なくその怒を含まんや 恒に之を存たんやと 視よ汝はかくいえど 力をきわめて悪を為すなり 6 ヨシヤ王のときエホバまた我にいい給いけるは 汝そむけるイスラエルのなせしことを見しや 彼はすべての高山にのぼり すべての青木の下にゆきて其処に姦淫を行えり 7 彼このすべての事を為せしのち 我かれに汝われに帰れと言いしかども われに帰らざりき 其悖れる姉妹なるユダ之を見たり 8 我に背けるイスラエル姦淫をなせしにより 我かれを出して離縁状をあたえたれど その悖れる姉妹なるユダは懼れずして往きて姦淫を行う 我これを見る 9 また其姦淫の噪をもてこの地を汚し 且つ石と木とに姦淫を行えり 10 此 諸 の事あるも 仍其悖れる姉妹なるユダは真心をもて我にかえらず偽れるのみと エホバいいたもう
11 エホバまた我にいいたまいけるは 背けるイスラエルは悖れるユダよりも自己を義とす 12 汝ゆきて北にむかい此言を宣ていうべし エホバいいたもう 背けるイスラエルよ 帰れわれ怒の面を汝らにむけじ われは矜恤ある者なり 怒 を限りなく含みおることあらじと エホバいいたもう 13 汝ただ汝の罪を認 わせ そは汝の神エホバにそむき経めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき 汝等わが声をきかざればなりと エホバいい給う 14 エホバいいたもう

背ける衆子よ我にかえれ　そはわれ汝等を娶ればなり　われ邑より一人　支派より二人を取りて　汝等をシオンにつれゆかん　15われ我心に合う牧者を汝等にあたえん　彼等は知識と明哲をもて汝等を養うべし　16エホバいいたもう　汝等地に増して多くならんときは人々復エホバの契約の櫃といわず　之を想いいでず　之を憶えず　これを尋ねず　これを作らざるべし　17その時エルサレムはエホバの座位と称えられ　万国の民ここに集まるべし　即ちエホバの名によりてエルサレムに集まり　重ねて其悪き心の剛愎なるにしたがいて行まざるべし　18その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいで　我汝らの先祖たちに与えて嗣しめし地に偕にきたるべし

19我いえり　嗚呼われいかにして汝を諸子の中に置き　万国の中にて最も美しき産業なる此美地を汝にあたえんと　我またいえり　汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと　20然にイスラエルの家よ　妻の誓いに違きてその夫を棄つるがごとく汝等われに背けりと　エホバいいたもう　21声山のうえに聞こゆ　是はイスラエルの民の悲しみ祈るなり　蓋彼等まがれる途にあゆみ　其神エホバを忘るればなり　22背ける諸子よ　我に帰れ　われ汝の退違をいやさん

視よ我儕なんじに到る　汝はわれらの神エホバなればなり　23信に諸の岡とおおくの山に救いを望むはいたずらなり　誠にイスラエルの救いはわれらの神エホバにあり　24羞恥はわれらの幼時より我儕の先祖の産業すなわち其多くの羊とそのおおくの牛および其子その女を呑み尽くせり　25われらは羞恥に臥し　我らは恥辱に覆わるべし　そは我儕とわれらの列祖は我らの幼時より今日にいたるまで罪をわれらの神エホバに犯し　我儕の神エホバの声に遵わざればなり

（口語訳）

1もし人がその妻を離婚し、女が彼のもとを去って、他人の妻となるなら、その人はふたたび彼女に帰るであろうか。その地は大いに汚れないであろうか。あなたは多くの恋人と姦淫を行った。しかもわたしに帰ろうというのか」と主は言われる。2「目をあげてもろもろの裸の山を見よ、姦淫を行わなかった所がどこにあるか。荒野にいるアラビヤびとがするように、あなたは道のかたわらに座して恋人を待った。あなたは姦淫の悪事をもって、この地を汚した。3それゆえ雨はとどめられ、春の雨は降らなかった。しかもあなたには遊女の額があり、少しも恥じようとはしない。4今あなたは、わたしを呼んで言ったではないか、『わが父よ、あなたはわたしの若い時の友です。5永久に怒られるのですか、終りまで憤られるのですか』と。見よ、あなたはこう言ったけれども、なしうるかぎりのもろもろの悪を行った」。

6ヨシヤ王の時、主はまたわたしに言われた、「あなたは、かの背信のイス

ラエルがしたことを見たか。彼女はすべての高い丘にのぼり、すべての青木の下に行って、そこで姦淫を行った。7わたしは、彼女がこのすべてを行った後、わたしの所に帰るであろうと思ったが、帰ってこなかった。その不信の姉妹ユダはこれを見た。8わたしが背信のイスラエルを、そのすべての姦淫のゆえに、離縁状を与えて出したのをユダは見た。しかもその不信の姉妹ユダは恐れず、自分も行って姦淫を行った。9彼女にとって姦淫は軽いことであったので、石と木とに姦淫を行って、この地を汚した。10このすべての事があっても、なおその不信の姉妹ユダは真心をもってわたしに帰らない、ただ偽っているだけだ」と主は言われる。

11主はまたわたしに言われた、「背信のイスラエルは不信のユダよりも自分の罪の少ないことを示した。12あなたは行って北にむかい、この言葉をのべて言うがよい、『主は言われる、背信のイスラエルよ、帰れ。わたしは怒りの顔をあなたがたに向けない、わたしはいつくしみ深い者である。いつまでも怒ることはしないと、主は言われる。13ただあなたは自分の罪を認め、あなたの神、主にそむいてすべての青木の下で異なる神々にあなたの愛を惜しまず与えたこと、わたしの声に聞き従わなかったことを言いあらわせと、主は言われる。14主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。町からひとり、氏族からふたりを取って、あなたがたをシオンへ連れて行こう。

15わたしは自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りとをもってあなたがたを養う。16主は言われる、あなたがたが地に増して多くなるとき、その日には、人々はかさねて「主の契約の箱」と言わず、これを思い出さず、これを覚えず、これを尋ねず、これを作らない。17そのときエルサレムは主のみ位ととなえられ、万国の民はここに集まる。すなわち主の名のもとにエルサレムに集まり、かさねて、かたくなに自分の悪い心に従うことはしない。18その日には、ユダの家はイスラエルの家と一緒になり、北の地から出て、わたしがあなたがたの先祖たちに嗣業として与えた地に共に来る。

19どのようにして、あなたをわたしの子どもたちのうちに置き、万国のうちで最も美しい嗣業である良い地をあなたに与えようかと、わたしは思っていた。わたしはまた、あなたがわたしを「わが父」と呼び、わたしに従って離れることはないと思っていた。20イスラエルの家よ、背信の妻が夫のもとを去るように、たしかに、あなたがたはわたしにそむいた』と主は言われる」。21裸の山の上に声が聞える、イスラエルの民が悲しみ祈るのである。彼らが

曲った道に歩み、その神、主を忘れたからだ。22「背信の子どもたちよ、帰れ。わたしはあなたがたの背信をいやす」。「見よ、われわれはあなたのもとに帰ります。あなたはわれわれの神、主であらせられます。23まことに、もろもろの丘は迷いであり、山の上の騒ぎも同じです。まことに、イスラエルの救はわれわれの神、主にあるのです。

24しかし、われわれの幼少の時から、恥ずべきことが、われわれの先祖のほねおって得たもの、すなわちその羊、その牛、およびそのむすこ、娘たちをことごとくのみ尽しました。25われわれは恥の中に伏し、はずかしめにおおわれています。それはわれわれと先祖とが、われわれの幼少の時から今日まで、われわれの神、主に罪を犯し、われわれの神、主の声に従わなかったからです」。

●エレミヤ記第3章

今日はエレミヤの第3章ですが、松江からカクイ先生がお見えになったので、あとでネパールのお話を承ります。

1**世にいえるあり 人もしその妻をいださんに 去りゆきてほかの人の妻とならば 其夫ふたたび彼に帰るべけんや さすれば其地はおおいに汚れざらんや**
汝はおおくの者と姦淫を行えり

「汝」というのはもちろんイスラエルのことで、「おおくの者」というのは、バーリーム、バールの神々です。

されど汝われに皈(かえ)れよと エホバいい給う 2汝目をあげてもろもろの童山(はげやま)をみよ 姦淫を行わざる所はいずこにあるや

そういった偶像崇拝です。

汝は曠野(あらの)におるアラビヤ人の為(な)すがごとく 路に坐して人をまてり
旅人を掠め奪うことです。
汝は姦淫と悪をもて

そういった偶像崇拝の宗教と道徳的な悪です。

此地を汚せり 3この故に雨はとどめられ 春の雨はふらざりし

この「春の雨」というのは即ち「のちの雨」といわれるものです。「さきの雨」というのはその前の秋に降る雨のことをいう。

然れど汝娼妓(あそびめ)の額(ひたい)あれば肯(あえ)て恥ず

その宗教的な姦淫をあえて恥じないと。

4汝いまより我を呼びていわざらんや 我父(わが)よ汝はわが少時(わかきとき)の交友(とも)なり 5窮(かぎり)なくその怒(いかり)を含まんや 恒(つね)に之を存(たも)たんやと 視よ汝はかくいえど 力をきわめ

て悪を為すなり

まぁ口語訳では所々今のと違うところが勿論ありますけれども、大体そんなわけです。

6**ヨシヤ王のとき**

宗教改革者のヨシヤ王ですね。紀元前621年。

エホバまた我にいい給いけるは　汝そむけるイスラエルのなせしことを見しや
彼はすべての高山にのぼり すべての青木の下にゆきて其処に姦淫を行えり

偶像崇拝を行った。

7**彼このすべての事を為せしのち　我かれに汝われに帰れと言いしかども　われ**
に帰らざりき　其悖れる姉妹なるユダ之を見たり

イスラエルに対してユダはこれを見たと。

8**我に背けるイスラエル姦淫をなせしにより**
我かれを出して離縁状をあたえたれど

この「背ける」というのは「背ける者」とむしろ名詞的に訳していいわけなんですが。

ということは、サマリヤの滅亡のことを暗に指しているわけです。即ち、棄てたと。アッシリヤを通して、イスラエルは神さまに棄てられた、罰せられたと。紀元前721年。

その悖れる姉妹なるユダは懼れずして往きて姦淫を行う

ユダもやはり同じく神から背いていると。

我これを見る　9また其姦淫の噪をもてこの地を汚し　且つ石と木とに姦淫を行
えり　10此　諸　の事あるも　仍其悖れる姉妹なるユダは真心をもて我にかえらず
偽れるのみと　エホバいいたもう

11**エホバまた我にいいたまいけるは　背けるイスラエルは悖れるユダよりも**
自己を義とす

義と証しする。イスラエルの方がユダよりもいいというわけなんですが。

12**汝ゆきて北にむかい此言を宣ていうべし**

「北」というのはアッシリヤのことです。東北に当たりますけれども。

エホバいいたもう　背けるイスラエルよ　帰れわれ怒の面を汝らにむけじ　われ
は矜恤ある者なり　怒を限りなく含みおることあらじと　エホバいいたもう

怒りをゆるめて、帰るのを待つという。

13**汝ただ汝の罪を認わせ**

神さまの前に立ち帰るときは、その心でなければならないわけです。

そは汝の神エホバにそむき経めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき　汝
等わが声をきかざればなりと　エホバいいたもう　背ける衆子
よ我にかえれ　そはわれ汝等を娶ればなり　われ邑より一人　支派より二人を取
りて　汝等をシオンにつれゆかん

エルサレムの神殿の在るところにですね。

15 **われ我心に合う牧者を汝等にあたえん 彼等は知識と明哲をもて汝等を養うべし** 16 **エホバいいたもう 汝等地に増して多くならんときは人々復エホバの契約の櫃といわず 之を想いいでず 之を憶えず これを尋ねず これを作らざるべし**

「契約の櫃」は勿論、神の臨在している所という意味で、信仰の対象の中心になるわけです。しかし、それをも用のないものにしてしまうというわけです。ということは、エレミヤのあとの方にいくとわかりますけれども、エレミヤは活ける神を本当に神殿とするので、いわゆる神殿宗教には反対である。その気持がここにも表れている。

17 **その時エルサレムはエホバの座位と称えられ 万国の民ここに集まるべし 即ちエホバの名によりてエルサレムに集まり**

聖名が大事である。

重ねて其悪き心の剛愎なるにしたがいて行まざるべし 18 **その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいで 我汝らの先祖たちに与えて嗣しめし地に偕にきたるべし**

非常にこれは明るい希望を預言しているわけです。今の16節あたりもその意味において非常に著しい言葉ですけれども。

19 **我いえり 嗚呼われいかにして汝を諸子の中に置き 万国の中にて最も美しき産業なる此美地を汝にあたえんと 我またいえり 汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと** 20 **然にイスラエルの家よ 妻の誓いに違きてその夫を棄つるがごとく汝等われに背けりと**

神さまの約束や、本願的な希望を踏みにじっているのではないかと。

エホバいいたもう 21 **声山のうえに聞こゆ 是はイスラエルの民の悲しみ祈るなり 蓋彼等まがれる途にあゆみ 其神エホバを忘るればなり** 22 **背ける諸子よ 我に帰れ われ汝の退違をいやさん**

「いやさん」という字は、「しずめん」とか「力を弱くする」という字です。

視よ我儕なんじに到る 汝はわれらの神エホバなればなり

と、今度は答える。

23 **信に諸の岡とおおくの山に救いを望むはいたずらなり 誠にイスラエルの救いはわれらの神エホバにあり** 24 **羞恥はわれらの幼時より我儕の先祖の産業すなわち其多くの羊とそのおおくの牛および其子その女を呑み尽くせり** 25 **われらは羞恥に臥し 我らは恥辱に覆わるべし そは我儕とわれらの列祖は我らの**

これは14節と同じように書いてある。「背ける諸子よ、我に帰れ」と。

幼時（わかきとき）より今日にいたるまで罪をわれらの神エホバに犯し　我儕の神エホバの声に遵（したが）わざればなり

と懺悔しているわけですね。

●我に帰れ

これで全部読んだわけですが、この第３章を見ますと、「帰る」という言葉が非常に繰り返して出てくるわけです。ヘブライ語でいいますと、「帰る」という言葉と「背（そむ）く」という言葉が同じ言葉なんです。どうしてかというと、「帰る」ということは、こっちに向いていたものをそっち〔反対の方〕に向きかえるということなんです。向き返りです。

今度は、こっちに向いていたものが別なところに向き変わってしまう。これが「背き」なんです。要するに、「向きをかえる」ことが「シューブ」という字です。「向きが変わってしまっているもの」というのが、複数でいうとこの「ショービーム」という字です。

「向きがかわっているお前たちよ」

というのがこの

「背ける者よ」

ということ。

「もういっぺん向きを変えろ」

という。それが「帰る」という言葉になる。同じ「向きをかえる」にしても、悪い方にかわるのと、いい方に変わるのと、「帰る」という言葉と「背く」という言葉が同じ言葉で使われているから面白い。

「いや、俺たちは世の中に帰る」

なんていったら、世の中を慕うようなことになって、世の中に「帰る」わけです。それは今度は、神さまに対しては「背く」ことになる。世の方に向いていた奴が今度は、神さまの方に向きかえるのが、これが本当の「帰る」です。

「我に帰れ」

というのは、

「我の方に向きなおれ」

ということです。

でも、エレミヤは勿論、北イスラエル・南ユダが神さまからアッシリヤとバビロニヤによって滅ぼされる、この事態はこの神からの背き、世への、世に対して〔世の方に〕向きをかえてしまっていること。それをもういっぺん神に――英語でいうと「リターン」(return)ですね、向きをかえることが「リターン」で、ドイツ語でいうと「ツルュックケーレン」(zurückkehren)です。「ケーレン」というのは「向く」という字ですから――もとへ帰ることです。

●我に帰入せよ

それだけの話です。けれども、「帰る」という言葉をもうひとつ強くすると、「帰入する」こと、帰り入らなくては、ただ向きを変えただけではまだダメなんです。向きを変えて本当にその中に入ってしまわないといかん。またどう向きが変わるかわからんです。もう向きの変わりようのないところに入ってしまう。そこが御霊の信仰と、普通の信仰との差なんです。普通の信仰だと、神さまの方に、キリストに向きを変えて、大いに「信ずる」といって、がんばっているわけだけれども、そのうちにくだびれてしまって、

「またエジプトに帰ろう」

なんていうわけで、曠野の旅からエジプトに帰ろうなんていう、世に帰る気持によって誘惑される。それは「背く」ことなんです。だから、向きを変えてキリストの方に向きが変わったら、今度は帰入しなくては、帰り入らなくてはいかん。だから、私に訳させれば、

「我に帰入せよ」

と訳したい。ただ帰るのではなくて、帰り入ることです。

まぁ今日は題にこんな「帰って来なさい」なんて優しい言葉で書いてしまったけれども、本当は「帰入せよ」ということで、滅多にこういう書き方はしない。「帰入せよ」ということです。

普通は「きにゅう」というのは「記入」、記（しる）し入ること。キリストの聖名を記入する、そのように帰り入る。即ち、御霊なるキリストの中に、御霊をもって突入、帰入する。信じ入る、

「信入」

する。祈り入る、

「祈入

というわけです。この帰入するまでは――御霊をたまわって、御霊を受けとって、そして同質になる――キリストと同質にならなければ、帰入することは出来ないわけです。聖霊が臨んでくるから、自分を明け渡していく。あるがままに自分を投げ入れる。そうすると、そこで本当に帰入できる。

だから、この14節と22節の、

「向きが変わっている子供たちよ、私の中にまた向きかえれ」

と、直訳すればそういうことです。口語訳では14節は何と訳してあるかな。

「14**主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。**」

「夫だからである」という訳し方をしてある。それはそれでいいです。文語訳は、

「14**エホバいいたもう 背ける衆子（こどもら）よ我にかえれ そはわれ汝等を娶（めと）ればなり**」

「汝等を娶ればなり」ではない。「娶ればなり」というと、何かこれから娶るようにみえるけれども、さっき私が「娶りたればなり」と訳したのはその意味なので、

「既にお前イスラエルは私の妻である」

ということ。これはホゼア書がそのことを徹底的に語っているわけです。

「夫であるから、元来そうなんだから戻ってこい」

と。それから22節の方も、

「22**背ける諸子（こどもら）よ 我に帰れ われ汝の退逆（そむき）をいやさん**」

「向きが変わっている子供たちよ、我にもういっぺん向きかえれ」

と。「シューブ」という字がいろいろ使ってある。「ショーバビーム」（背ける子ら）というのはそういうわけ。

「向きの変わっている子らよ、私の所にお前は帰ってこい」

と。「いやさん」は「アルパー」即ち「弱くするぞ」とか、或いは

「静ませるぞ、汝ら向きの変わった者たちよ」

と、直訳するとそうなんです。即ち、

「背ける子らよ、我に帰れ、我汝らの背きをいやさん」

という。

要するに人生は向き方ひとつなんです。何事でも本当にそれをその方に向いて――「向上」というね、向上精神なんてね、上に向かっている――我々は立っていると、身体は天を指している。天に向いている。本来、中天に向いているんだから、人間の姿というのは。身体は立っているから、ちゃんと中天を向いているのに、心がこっち〔横〕を向いたり、下を向いたりする。

祈りの世界でも――それは平伏して祈ることも勿論いいですよ。「平伏しの魂」というのはいいんです。それはぶっつぶれていなくはいかん。ある意味において、ぶっつぶれていなくはダメです。けれどもまた――本当に祈りは、神の霊は垂直に来ますよ、上からのそれを受けとること。だから、合掌するのも、手を上にあげる。心臓よりも手を上にあげる。自然にそういう体勢になる。あるいは、両手を挙げて祈る祈り方もイスラエルではやるようだけれども。ちょうど向日葵（ひまわり）のように陽に向かって動いている。朝顔のように、我々の魂も上に向かって開いていなくてはいかん。

四方は八方塞がりだって一向差し支えない。上は開いている。四方八方というのは横の話だから次元がちがう。これは縦だ。この霊界とは何ものもこれを塞ぐことができない。人間界はいろいろな妨げがある。けれども、この霊界は、この〔縦の〕貫きです。キリストは降下してくる。神さまは、聖霊は降下降臨でしょうが。上から垂直に臨んでくるから、そいつを上に対して、まさに向上、上に向く。

それでこれが〔上から〕来るから、今度は逆に〔下から上向きに〕こう流れて、全部これを突破してしまう。どんな妨げも全部突破してしまう。この力にかなうものはないですから。それが御霊の力です。そしてこれでもって今度は、相手を全部荷いあげてしまう。全部グーッとこれを受けてしまう。これはちょうど錨の形みたいなものだ、「我は錨なり」なんていう。

●キリストという道に帰道する

そういうような具合なのが、私たちの向きです。私たちは霊的な磁石だから、天極を指している。どんなに揺れても必ず天極を指す。それだけのことがはっきり言えなかったらダメですよ。

「どうも、私の信仰はまだそこまでいってません」

なんて、自分の信仰なんか問題にしているからそういうことになる。自分の信仰なんてものは当てにならない。上からくるものだけ、それだけが当てになる。それは無条件に受けとれる。

いつも言っているとおり、空気は無条件にきている。キリストの霊は無条件に受けとれる。これは十字架でもって既に道は開かれているんだ。だから、

「我既に贖(あがな)いたり。ゆえに我に立ち帰れ」

というんです。

「既に贖ってあるから、文句はない。お前の状態如何には絶対に係わりがない」

というわけでして、もうこの一点です、問題は。そうしたらもう、どんどん、どういう人でも帰って行ける。

どうしてみんな考えるんですかね、

「我思うゆえに我あり」

なんてやっているから、ちっとも在りはしない、本当に。現代人はあまり考えすぎる。

「お前はどう考えるか？」

なんて。自主だとか自由だとか、ちっとも自主でも自由でも何でもないです、そんなものは。それはみんな間違っている。

まず、神の僕にならなくてはいかん。〔己の〕「自由」に死ななければ、本当の自由はこない。〔己の〕「自主」に死ななければ、本当の自主はこない。そのことが、どう考えても、もうすべての問題の根底ですね。だから、私はいつも言っている、

「キリストは自分を何ものともなさらないから、イエス・キリストは無者である。だから、これが無限無量者となる」

と。この一点です。私たちの無は禅宗的に悟っている無ではない。

「キリストの十字架によって、我というものからすっ飛ばされて、無私なるものにされている」

ので、何を問題にしているか。何も問題はないじゃないですか。そうしたら、

「御霊を受けろ」

と。この御霊が来るから、無即無限無量となってくるわけです。

本当に「帰る」というのは、この消息がなければ、「帰る」なんていったってダメですよ、ちょっと頑張ってみたって。それは、帰らしめるところの力があるわけです。

「上からの本願」

がかかっているから。本願に対しては帰入せざるを得ない。これを受けとったら、行かざるを得ない。どこへ行こうが必ず行き詰まる。ただ一つ行き詰まらない道は、このキリストの本願の道に入ることです。

「我は道なり」

というのは、キリストという道に帰ること、帰道するわけです。

まぁ諸々の問題の中心は、まずこれをしっかりしないで、もう地上のどんな問題も、政治の問題も、経済の問題も、教育の問題も、その他事業にしろ何にしろみんな行き詰まってしまう。みんな混沌だ。

宗教のことは一切のことの根底であるから、最大の関心事にならなければいかんのに、そのことだけはお預けにしているから、日本はいつまでたっても始まらない。

どうぞ、皆さんはそれだけの使命を持っているから、絶対にこれは証していかなければダメです。

●ネパールでの伝道報告（省略）

ちょうど半〔11時半〕になりましたので、これからカクイ先生からお話を承ります。

その前に讃美歌239番「さまようひとびと」を歌います。

今朝、突然お見えになりまして、松江のイエス・キリスト教会という、これは単立の独立の教会です。カクイヨシイ先生がお見えになった。先程ちょっと承ったら、ネパールの方に伝道に行かれたわけで、そのお話をぜひ承りたいと思います。よろしくお願いいたします。

「私も先生のお教えを受けたいと思いまして、今日はおじゃまいたしました。大変、お恵みを受けましてありがたいと思っております。ネパールのお話をということでございましたので。私は昨年12月20日に日本を立ちまして1月7日に羽田に帰って参りました。……〔中略〕……。本当に、『物で富んで心で滅びる』という本を見てびっくりしました。これが日本の姿だなぁと。日本は或いはもういっぺん滅ぼしてもらわなければ分からないかも知らんなと思いました。私は本当にそういう意味で、この日本は人間の原点ではないか。裸足、そして裸、全くこれは人間の我々、私もそうでなかったかと思いました。もういっぺんその原点に帰って、今日のお話のように上を向いてイエスさまのところへ帰ろうと、そういう人たちのために私は祈ってほしいと思います。また、ネパールを覚えてください。ありがとうございました。」

どうもありがとうございました。非常に感銘深く承りました。では、お祈りいたします。